

2015年アメリカはロシアを攻撃する

平和統一 NEWS No. 77 (2015/1月号)

渡辺 久義

この題は私がつけたものではない。Information Clearing House というサイトに見つけた、Evgeny Fedorov という、まだ若い明哲というべきロシア連邦代議員が、更に若い二人の記者を相手に、世界の情勢分析をするビデオにつけられた題である。この 2 時間近い熱弁を、英語翻訳字幕を読みながらたどるのは大変だが、これは見応えがあり推奨に値する。これによってかなりの知識が、特にロシア内部の事情について、得られる。収録は 2014 年 5 月 13 日。この時点で、クリミア編入とウクライナ政府による東部地区爆撃は行われているが、まだ問題のマレーシア航空機撃墜事件 (7/17) とそれに伴う経済制裁は起こっておらず、もちろん最近の、米下院の狂気じみた、宣戦布告に等しい“侵略国”ロシア非難決議 (12/6) もなされていない (12/12 掲載「向う見ずの米議会がロシアに“宣戦布告”——ロン・ポール」)。

この予言はすでに当たったとも言えるが、これは近未来の、もっと壮絶な総力戦の予測だと考えてよい。

このビデオで私が初めて知って驚いたのは、ロシア国内に相当数の、アメリカと通ずるスパイ集団が存在するという事、それによってロシアのメディアでさえアメリカに影響されているらしいことである。(これでプーチン大統領の先日の大演説の意味が理解できる——12/12「嫌気のさしたロシアが、アングロ・シオニスト帝国との対話を打ち切る」)

エヴゲニー・フェドロフは、国民投票を(クリミアのように)ドネツク、ルガンスク地区でも行って、ロシア本国も同じ状況にあるという危機意識をロシア市民にもたせることだ、そうしなければ国は守れない、一旦アメリカがロシア人のすきを狙ってロシアに侵入すれば、彼らはヒトラーが狙ったような殲滅作戦を行うはずだと言う。

この戦いがよく言われる“ハルマゲドン”(神と悪魔の最後の代理戦争)であるとしたら、この分析は誇張でないと思う。これはこれまでの彼ら(イスラエルも含めて)の、子供を含む民間人に対する残虐さと、最近暴露された CIA の拷問の習慣をみればわかる。9・11 事件直後に捕えられたイスラム教徒アブー・ズバイダーは、普通の面談で、知っている軍事機密(?)を全部話したにもかかわらず、長く拘留されて 83 回も水責めにされた。それ以上

知っていることがないのが分かっている、彼らはそういうことをするのだから、これは拷問を楽しむためとしか考えられない（12/17「拷問をめぐる対面する二人の激突——元 CIA 高官の手記」）。

同じ人間なのに、そんなことをする者はまさかいないだろう、と半ば軽蔑して言う人があるかもしれない。しかしこの世界制覇を狙う者たちは、サイコパス（またはソシオパス）と呼ばれる異常者であって、普通の人間ではない。これは『ザ・シンクロシティ・キー』にも詳しく分析されているが、Global Research サイトの論文「悪い奴らが勝ち続ける 7つの理由」は、その1つの理由は、「スーパー・エリートも“我々と同じ”と考えること」だと言っている。この連中は脳内に分泌されるドーパミンに異常があるという——「サイコパスたちは、欲しいものを、結果を考えずにモノにしようとする冷血の犯罪者と考えられている。我々の研究から、ある超反応性をもつドーパミンの報奨機構が、暴力犯罪、常習犯罪、また薬物乱用のような、サイコパス症状に関連する最も問題となるほとんどの振舞いの、土台になっているらしいことがわかった。」

要するに、人を苦しめ、また人が苦しむのを見、人に恐怖や不安や脅しを与えることによって、気持ちがよくなる人々がいるということである。今回の CIA の拷問について私は多くのコメントを読んだが、この点を指摘したものには出会わなかった。デイヴィッド・ウィルコックは、彼の知るインサイダーからの情報として、こういうマイナス感情の累積によって、ある種の物質のようなものが世界に充満し、これを彼らは“loosh”と呼んで活力源にしているのだという。彼らは戦争屋だから、儲けるために戦争するのだというだけでは、十分な説明ではないようだ。サイコパスは我々の周囲にもいるから、観察することができる。

我々（要するにメディア）は彼らを、戦前の言葉でいう「お上^{かみ}」として奉っていて、お上のなさることには口出ししない、できないことになっている。これが一番よくわかるのは「ケムトレイル」である。この連続エッセーの読者に説明はいらないだろう。

エヴゲニー・フェドロフは、彼らの精神構造と手の内を完全に理解している。彼らの本質は thugs（暴力団）であり、すべての暴力団がそうであるように、自分に権力があるところを見せつけようとする。（彼らは今全米の警察官を thugs として武装させている。）彼は釣りの比喻を用いてこれを説明する。我々は針にエサをつけて魚を騙し、釣り上げたときは「やったー」と言って喜ぶが、彼らは針にエサをつけて人間を騙し、釣り上げては「やったー」と喜ぶ。彼らにとって彼ら以外の存在は人間以下である。人種差別も間引きも当然のことであり、それによって“新世界秩序”が可能になる。

しかし彼らは馬鹿ではないから、自分たちの時代が終わろうとしているのを知っている。も

う残された時間はない。だから、マレーシア航空機撃墜の工作がばれようと、何だろうと、強引にロシアに経済制裁を課したように、彼らは追い詰められて、全面戦争をロシアに仕掛けるだろう。問題は、メディアがいつまで彼らの宣伝を引き受けるかである。